

豊見城グスクの城門写真についての分析・考察

キーワード: 豊見城城址公園跡地、グスク、文化財保護法、古写真の分析、復元手法

1. 豊見城グスクの歴史・文化的価値

豊見城グスクは、豊見城市字豊見城集落の東北にある丘陵上に形成されたグスクである。北側に漫湖、東側には饒波川を望む位置にあり、グスクの北・東側は崖、西側は急斜面、南側はゆるやかな平地となっている。西側及び南側は字豊見城の集落と接している。

これまで豊見城城址公園として使用されてきた経緯もあり発掘調査等は行われていないが、グスクは南北に長く築かれ、南に南風原門、北に西原門を開き、野面積みの石垣によって築かれた城壁があったと、村史等には記されている。グスク内にはハーリーや雨乞いとの関係の深い豊見瀬御嶽が所在する他、周辺には複数の文化財が分布している。また、グスクの防衛に使用されていたと考えられる小高い丘・堀等が残されている他、琉球王府時代の軍用道路である真珠道がグスク内部あるいは外周を通っていたと考えられており、防衛拠点としてグスクの姿を認めることができる。豊見城グスクの歴史文化的価値を整理すると、右表の7点に集約できる。

図1グスク及び周辺の文化財(重要なものを抜粋)



表1 豊見城グスクのグスクとしての歴史・文化的重要性

① 豊見城発祥の地	豊見城に最初に誕生した集落は瀬長村(瀬長島)であるが、その後現在の豊見城城址周辺に移り住むようになり、ここがムラづくりの拠点となった。 ・「とみぐすく」という地名は、豊見城グスクが「とよみグスク(名高いグスク)」と呼称されたことに由来する。
② 南山の要としての本格的築城	築城年代は明らかではないが、12~13世紀のグスク時代にはすでに小規模なグスクが形成され、14世紀末~15世紀初めに南山王の従弟・汪応祖により築かれたこと等が文献上で伝聞として記載されている。
③ 琉球王国の防衛拠点	尚真王代に軍用道路として建設された真珠道は、豊見城城址の内部あるいは外周を通っていたと考えられ、「真珠湊碑」に「国の防衛のため、根立樋川と豊見城グスクと水の確保のために王命により建設された」とあり、豊見城グスクは真珠道とともに、那覇港防衛の拠点となっていた。 ・周囲を崖に囲まれた立地や、三重の郭であること、ウガンヤマや出丸といった防衛施設からも、豊見城城址の要塞としての機能の重要性がうかがえる。
④ 水辺の自然景観	城址斜面に発達した緑地は、かつて活発な水運でにぎわった那覇港・漫湖で唯一残された自然景観であり、往時の城址と水域の関係を追体験できる基盤が残っている。
⑤ 城郭の大きさ	地形や古地図・古老等のヒアリングから作成された縄張り推定図によれば、面積は約36,600ha程であったという。 ・県内に残存する他のグスクと比較しても大きなグスクであり、琉球史における豊見城城址の重要性がうかがえる。
⑥ 石造技術の高さ	西原門や豊見瀬御嶽の門はアーチ状になっており、首里城と同じくらい古いアーチ門である可能性がある。 ・このような城門の姿は県内でも希少であり、石火矢橋と合わせて、琉球の石造技術が理解できる。
⑦ 地域との関わり	・城址内には字豊見城の拝所が複数所在し、かつ現在も拝み行事が行われている。 ・ハーリー等の行事との関係も深い。 ・拝所は地域住民によって定期的に清掃が行われており、豊見城城址が地域の文化継承や連帯創出の場となっているといえる。

2. 豊見城グスク復元の可能性についての検討

文化財保護法第1条に「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする」

と明記されているように、史跡等の本質的価値を調査・継承し、市民が理解しやすい形で公開、まちづくりや観光のための資源として活用することが、史跡等の整備における基本的な理念である。史跡の復元も、史跡等の本質的価値を理解しやすい形で公開するために行うものである。

理念を実現するためには、個別の史跡の状

況にあわせて計画・設計として具現化される必要があり、その際には適切な技術を選択する必要がある。『史跡等整備のてびき一保存と活用のために一』によれば、史跡等における復元には、復元する位置や対象となる要素によって下表に示したような5つの類型がある。

表2 史跡等の復元の種類と豊見城グスクへの応用可能性

①復元修理	・建造物・構造物等の修理を行う過程において、その遺存状況は良好だが一部に欠失または改変が認められ、部材等に遺る痕跡などの直接的根拠に基づき、高い精度で当初の意匠・構造・技術が判明した場合に、当初と同様の材料・工法を用いて復元を行うこと。
②復元展示	・今は失われて残らない建造物・構造物を、発掘調査の成果や資料等の分析結果に基づき、遺構直上の盛土造成面において、当初の材料及び工法等に十分配慮しつつ新たに再建すること。遺構の残存状況や資料等の多寡によって3つに区別できる。
③野外復元	・発掘調査で判明した地下遺構その他の関連資料に基づき、当時の建造物・構造物等を、地下遺構とは関係のない野外の異なる位置において実寸の標本として展示すること。 ・史跡の復元というよりも、資料館・博物館等における屋内展示と同一のものと捉えられる。
④地形復元	・自然の成因によるか人工の造成によるかを問わず、史跡等のかつての地表面の起伏を復元的に造成すること。発掘等によって判明する遺構面は削平などの改変を受けているため、当初の地形の状態を正確に復元することが困難である場合が多い。
⑤植生復元	・種子・枝葉等の植物遺体の同定及び花粉分析等の結果に基づき、当時の植生を復元的に造成すること。しかし発掘調査により当時の樹叢の範囲や密度が判明する可能性は低く、史跡等の指定地内の環境整備の一環として、当時の植生が復元的に造成される場合が多い。

このうち、豊見城グスクにおいては「②復元展示」から「⑤植生復元」の4つが応用可能と考えられる。ただし、すべてに「発掘調査等により復元を可能とするレベルの成果が得られれば」という注釈がつく。

これまで豊見城城址公園跡地においては、民有地であったことも影響し、全体的な発掘調査が実施されたことはない。城址公園整備時の手の入れ方の度合いにもよるが、地下遺構は残存していることが期待されており、早急な発掘調査が望まれる。

3. 古絵図・古写真の分析

史跡等の復元においては、発掘調査の成果以外にも、古絵図や古写真等を分析したり、同時代同種の史跡を参考にしたりする手法がある。なお、古写真の分析は、当社が浦添ようどれの復元の際にも使用した手法である（詳しくは「国建の半世紀」を参照）。豊見城グスクも、城壁や城門を撮影した写真等が数枚残されており、分析が可能である。

以下に、城門の写真をいくつかを取り上げて分析する。

<分析の前に>

豊見城グスクには、一番外側の城壁の北側に西原門、南側に南風原門と呼ばれる2つの門があったとされる。また、地域古老の話では、グスクの最も高い場所（一の郭のことか）には豊見瀬御嶽があり、御嶽には戦後まで城壁および城門が残っていたという。関係者の間では、豊見城グスクの城門を撮影した写真には、西原門と豊見瀬御嶽の門を撮影した2種類があると捉えられている。

※ ※ ※

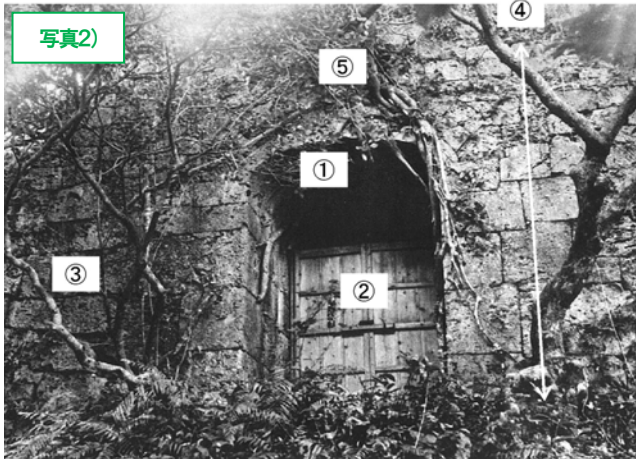
1)ペリル提督遠征記／1853年頃



- A) 豊見城グスクは約8エーカー(約32,376㎡)の大規模な城だが、荒廃している。
- B) 城壁で囲まれた長方形の空き地があり、約12フィート(約360cm)の高さで、他の部分よりも保存がよい。
- C) 西側には巨大なアーチ形の門があり、木の扉をつけ、支那錠で閉められている。アーチの頂辺には大樹が生えており、その根をよじ登って区画された空地へ出た。そうしなければ足を踏み入れることもできない繁みの中を通っている狭い小路を行くと、城址の頂に達した。
- D) 城址の頂には、支那文字を刻んだ二つの石があり、いくつかの joss sticks(線香)の残骸もあった。

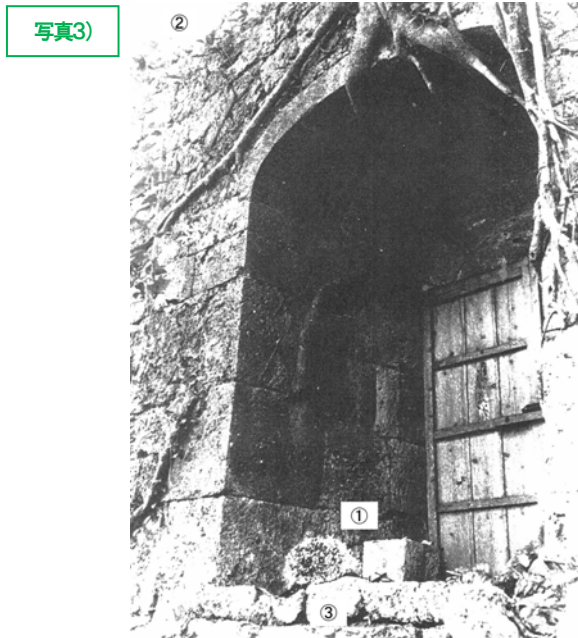
- 城門は石造でアーチ状 (1) になり、木製の扉が内側に開かれている (2)。
- 城門の左側は小高い丘のようなものと接している (3)。
- 休む一行の後ろには、那覇港や奥武山と思しき島々が描かれており (4)、グスクの北端あるいは最も高い場所から西ないしは北西の方角に向けて写し取ったと思われる。
- 位置及び方角的には西原門である可能性があるが、(D)の「支那文字を刻んだ石」「線香の残骸」「城址の頂」の記述から、豊見瀬御嶽とも考えられる。
- 一行は、アーチ型の門を乗り越えた後、茂みの中を狭い小道を通って、豊見瀬御嶽へ到達している (C)。地域古老からのヒアリングによれば豊見瀬御嶽の門は戦後まで残存していたというが、ペリー提督の記録には一行が乗り越えたアーチ門の他には城門は登場しないため、一行が乗り越えた石門 (=絵図に書かれた門) は豊見瀬御嶽の門である可能性もある。

2) 豊見城城址 城門(田辺泰撮影)／1930年代



- 豊見城グスクの城門と記されているのみで、どの門を撮影したものかは不明。
- 切石を積み、アーチ門を形成している (①)。木製の扉がつけられている (②)。
- 城壁は布積み (③) となっており、④の位置まで積まれている。アーチ部の上部は更に高くなっているように見える。
- 城門の上には、ガジュマルの根のようなものが張っており (⑤)、「ペリル提督日本遠征記」に登場するアーチ門と同じものか。

3) 豊見城グスク内の石造城門(森政三撮影)／撮影年代不明



- 豊見城グスク内の石造城門とのみ記されており、詳細は不明。
- 門の前には、石製の方形香炉が置かれている (①)。香炉左の物体は不明。香炉が置かれているということは、木製の門は反対側に向かって開く可能性がある。
- ハレーションのため分かりづらいが、石積みは②の位置まで積まれているように見える。
- 基壇は二重に石を敷いている (③)。

※豊見城市文化課等、関係者の間では豊見瀬御嶽の門の写真と考えられている。

4) 米軍撮影の映像(沖縄県公文書館所有)／終戦直後に撮影か

※写真は次ページに掲載(写真4)

- 戦後米軍が撮影した映像のうち、豊見城グスクを写したものとされる。
- 城門付近の石積みは布積み (①) だが、他の部分は野面積み (②・③) となっている。
- 城門の右側には岩盤のようなものが露出 (④) している(ペリル提督日本遠征記で描かれた城門が接している小高い丘のようなものはこれのことか)。
- 城門の前に立つ米軍兵士 (⑤) の身長から、アーチ門および城壁の高さを概算すると、次の通りである。

写真上で計算すると、 $a : b : c = 1 : 1.3 : 2$

アメリカ人男性の平均身長は175cm (2001年時点)

よって

a (米軍身長)	=175cm
b (アーチ門高さ)	=227.5cm
c (城壁高さ)	=350cm

- ※「ペリー提督日本遠征記」には、城壁の高さはおよそ12フィート (360cm) との記述があり、概ね符合する。

なお、植物の根の張り方や石積みの形、木の位置から、2) 3) 4) の写真は、同じ門を撮影したものと思われる。

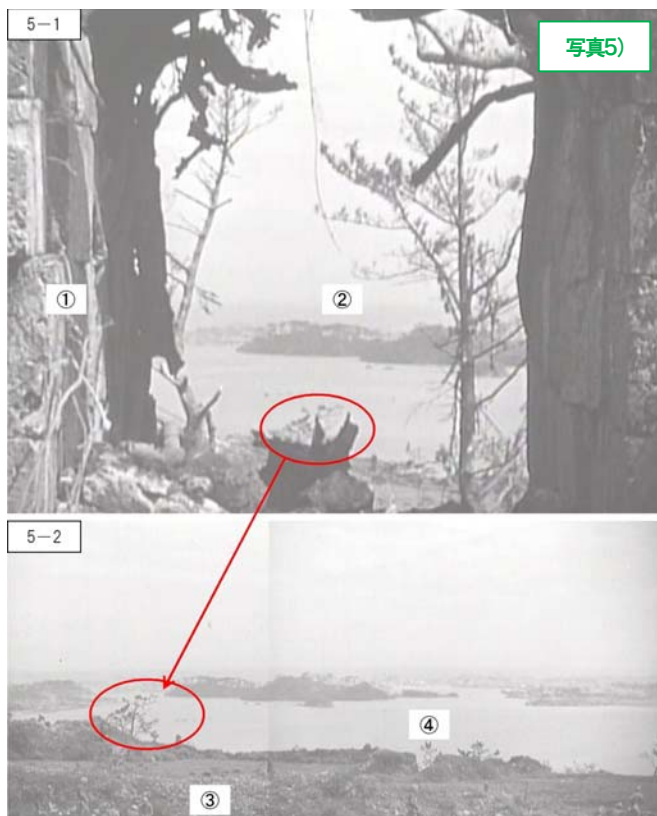
5) 米軍撮影の映像／終戦直後に撮影か

※写真は次ページに掲載(写真5)

- 5-1は石造の門の間 (①) から、奥武山辺りを写した景色 (②) と考えられる。
- 5-2は、5-1を撮影した場所 (つまり石門) よりも低い位置から撮影したと考えられることから、石造の門があった場所の外側は崖になっているのではなく、広場があったことが伺える。このことから、5-1に映った石門は、西原門ではなく一の郭にあったとされる豊見瀬御嶽の門である可能性が高い。
- 5-2は二の郭あるいは三の郭を映した景色と推測されるが、石積みがとところどころに残されていた (③) ことが伺える。俯瞰気味の写真であるため、石積みの高さについてははっきりと分からないが、城壁近くに立つ米軍兵士の身長とほぼ同じ高さである。
- 5-2が二の郭を撮影した写真と仮定すると、④は西原門跡である可能性が高い。
- ④が西原門跡だとすれば、終戦直後には西原門は残存していなかったことになり、5-1に映った石門と4) の映像に写った石門は、同じ門を撮影したものである可能性が高い。したがって、2) 3) 4) 5) の写真はすべて豊見瀬御嶽の写真である可能性がある。



※写真4) 5) ともに、映像は豊見城市より。ここで示した写真は画面のキャプチャをつなげたものである。



ただし、豊見瀬御嶽の門とは地域での呼称であり、豊見瀬御嶽のみを囲っていた石垣および石門があったわけではないと思われる。一の郭の城門内に豊見瀬御嶽があったため、一の郭の城門が地域住民から豊見瀬御嶽の門と呼ばれるようになった可能性も考えられる。撮影された城門がどの門なのかを特定する作業が今後必要になる。

※ ※ ※

参考文献；

『文化観光資源活用検討調査報告書(豊見城城址公園跡地利用基本構想)』豊見城市 2013年

『史跡等整備のてびき—保存と活用のために—』文化庁文化財部記念物課 2005年

〔文責：地域計画部 伊波なぎさ〕

6) 古絵図・古写真分析のまとめ

これまで、豊見城グスクの城門を撮影した写真には西原門を撮影したものと豊見瀬御嶽の門を撮影したものの2種類があると考えられてきた。しかし、積まれた石積みの形や周辺の木々、城門に根を張る植物の根の形等から、写真はすべて同一の城門を撮影したと想定される。

また、豊見城市が発見した米軍撮影の映像に写された城門及び広場の写真からは、①西原門が戦後にはすでに失われていたこと、②西原門があったとされる位置よりも高い位置に別の城門があった(=豊見瀬御嶽の門)ことの2点が推測できる。この推測が確かならば、写真に撮影された城門は豊見瀬御嶽の門であると考えられ、同城門の復元の際にはおおいに活用可能だろう。